

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

ル 4
6318
1



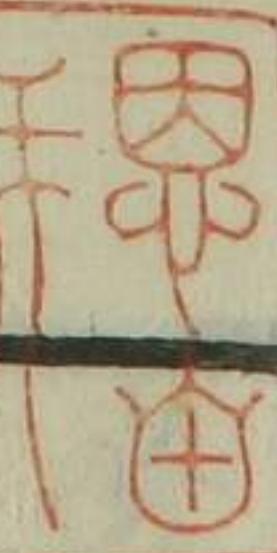
北越雪譜

初編
三卷

越後鈴木牧之撰
江戸京水百鶴画
京山人百樹刪定

江戸書肆

文溪堂梓行



北越雪譜敘

世之農商而嗜文雅者或不知斯云文雅為文雅徒企羨韻士墨客之同標沈酣文酒流連忘月而置生計於不問以傾產業者尚亦有之是宣嗜文雅眾矣其人特自取之耳矣鈴木牧之翁者北越鹽澤之老農也性嗜文雅而能尚節儉抑驕惰不絕誦讀於經營之中而務鉅穀於會計之餘以父遠近之墨客嘗以堪忍之二字

銘自守故其名久布遠邑而生業亦因以致
豐饒矣嗚呼若翁者不徇文雅之名而能務其
實者非耶余於翁得一面識於江戶而後持以
書訊交者有年于此今茲乙未遠寄示予平著
北越雪譜者六卷併囑以校刊時方盛夏炎威
如燬乃就小窗下試繙多閱之則越雪恍如耳
聞騷屑之聲因見移霏之影使人頓忘飄中之
苦讀到積疊埋屋行旅不通人以窮乏柴米或
苦

不給則凜然寒顫肌膚为之栗生矣余因以謁
袍袴輕薄子弟當微稟俄一下紛々舞空之際
鞍袞勒飛玉衣於郊坰或籠帽棕鞋踏瓊於
街衢或重舸載妓或高樓呼酒直以豪勝遊樂
事曾不知飢寒如何物若余其人謹此書以
想其種々凍餒之苦狀乎然則安寧不有無
怪非宴安之公共而戚戚噬嗑之心有哉
寧梓多行之至有裨益世教蓋非鮮小也間者

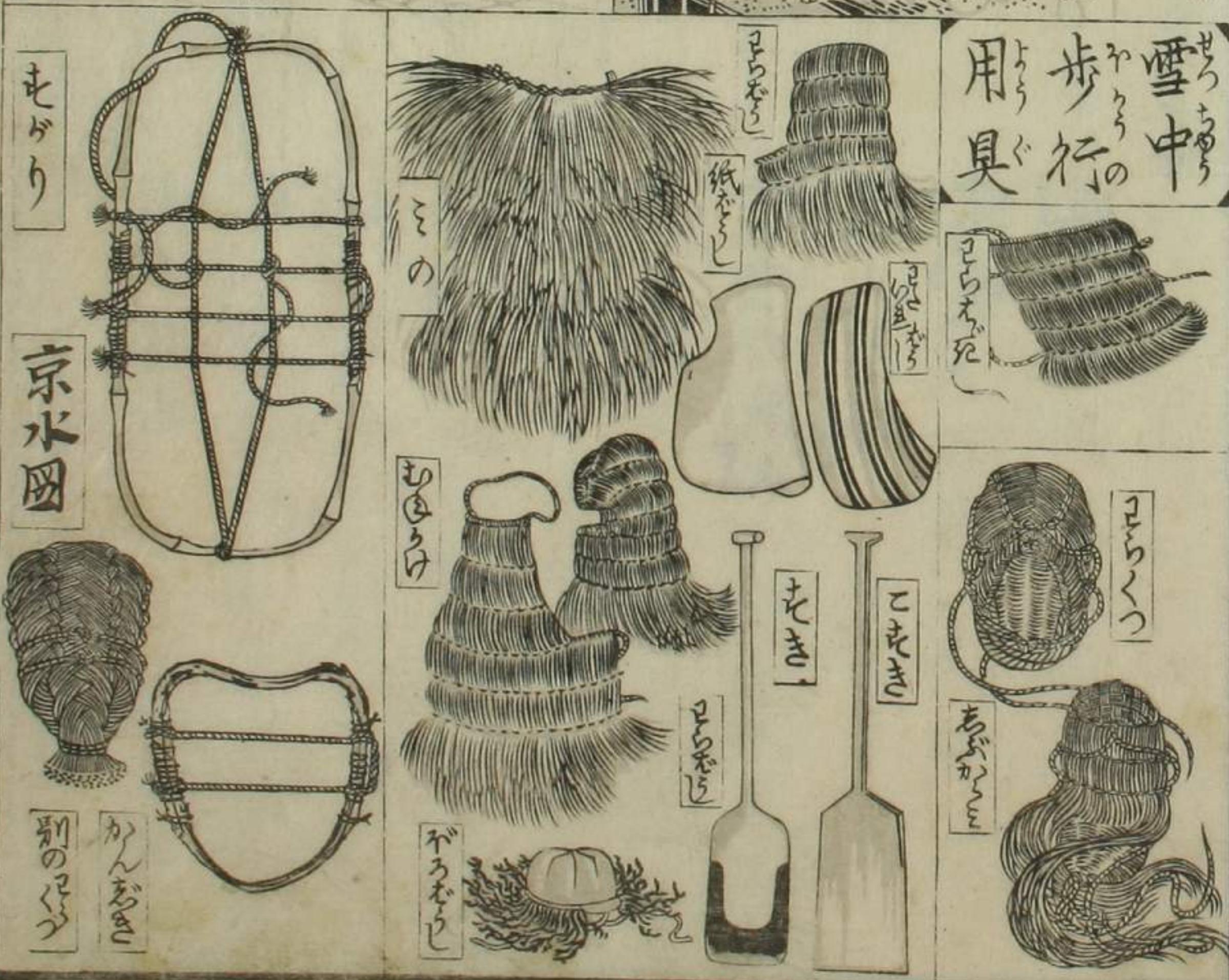
西言卷二
文
稍稍得秋涼聊前々取難投訂方畢者三卷書賈
文溪堂見而喜之謀梓レシトア之余寄簡以告翁曰
雪中閉戶漫筆豈敢後梓耶於是字不復候請
之於翁舉以符之翁之嗜文雅而能窮其實以
必笑領之而已翁之稿本國字之間隴字者嘗
不添音訓之假名余今盡添之以便童蒙云爾
天保六年乙未秋固萬開日

江戸京山人百樹并書



此書の稿本圖別冊と/or其說大圖並描て添るを重
皆牧之翁が自筆の草画也此舉梓行の為せむ鵠之圖
洪纖重複ある今梓に臨てその過半或省き或改新に
考れを存して卷中夾利考ハ單冊にて誰殘學せ則
是刪定の意也何せ余嘗て原圖以閱考之雪中の瘡狀
混錯を走墨參して通曉し細き如靴中の瘡庠も其何如
尤惟翁が草圖に倣ひて亭子描ぢて或原圖の梓入るより則
毫端加く或説有て圖考之の事説據て其圖以作りもあり益余悉
越地跋踏す越雪の真景す於て茫然たり故に雪圖以て達漏は
知らず乎其豫を編者駢を乞ひ乙未秋京水百鶴





京水図

ロノ四
一
二
三
四

江戸醉石山人禄題

京水筆

枕間簾
雪華飛天
曙空來白
四圍烟絕
樵林人不見
風淒羈徑犬
空飢懶乘冷袍
促高履屢
排寒光集敵衣
屋裡要知
春到牆頭立
早梅隸
右賦小越雪景



北越雪譜初編中下卷之上目錄

地氣雪と成る弁

雪の形状

雪の深淺

雪意

雪の用意

初雪

雪を堆量

雪竿

雪を拂ふ

雪沫

雪道

雪蟻

胎内潛

雪中

熊捕並白熊

雪中

雪中の中火

雪吹

雪中の中火

破月山

北越雪譜初編卷之上

越後塙澤 鈴木牧之 編撰
江戸 京山人百樹 刪定

○地氣雪と成る弁

凡天より形氣爲て下す物。雨。雪。霰。霧。雹。露。地氣の粒珠。所謂地氣の凝結。所冷氣の強弱。不よて其形と異ふ。もとの地氣天より上騰形を爲て雨。雪。霰。霧。雹。と。も。温氣をう。宣。水。と。も。水。ハ。地の全體。も。元。の。地。ふ。破。月。地中。深。け。と。か。き。ず。温氣。あ。り。地温。う。或。得。て。氣。吐。天。向。て。上。騰。す。人の。氣。息。の。ご。と。昼夜。序。時。も。絶。らず。す。キ。天。も。又。氣。吐。て。地。下。す。是。天地。の。呼吸。ひ。り。人の。呼。と。吸。ひ。の。ご。と。天地。呼吸。して。萬物。を。生。育。天地。の。呼。吸。常。失。ふ。時。ハ。暑。寒。時。不。應。せ。ば。大。風。大。雨。其。餘。ま。ぐ。の。天。寢。あ。り。天地。の。病。天。不。九。の。段。あり。亘。を。九。天。と。九。段。の。内。最。地。不。近。き。所。を。太。陰。天。と。地。地。高。三。八。方。太。陰。天。と。地。と。の。間。不。三。ツ。の。際。

あり天小近を熱際とひ中を冷際とひ地小近を温際とひ地氣へ冷際を限りと
して熱際小至らず冷温の二段ハ地を去るす甚ざ遠くテ富士山ハ温際を越て冷際
ふちをせよ名絶頂ハ温氣通せざる由も艸木を生ぜず夏も寒く雷鳴暴雨を温
際の下ふる雷と夕立をえきの雲ハ地中の温氣より生ぢる物也其起る形
湯氣のど一水成沸て湯氣の起と同ド由ニ雲温氣の起と同ド由ニ雲温氣の起
際ふじて温氣消て兩とう湯氣の冷て露とさう如一にて雨成る事
さて兩露の粒珠ハ天地の氣中ふ在る故以て艸木の實の圓成し乍らも氣中ふ
生むる由云々雲冷際小いよて兩とういとまる時天寒甚いた時ハ兩氷の粒と
りて降り下る天寒の強と弱とふよりて粒珠の大小成爲す是を霰ヒ需要トモセ
電ハ夏ありをの年地の寒と強き時ハ地氣形成する由て天小升る微温湯氣のど一
天の曇ヒ是ニ地氣上騰ヒと多けまば天灰色をうして雪うんとて曇うる雲冷
際小到り先兩とう此時冷際の寒氣兩氷成す力たゞぎる由氣花粉を爲して

○雪の形

下に是雪ニ地寒のよきとつよきとふよりて冰の厚と薄と如一天小温冷熱の三
際あく人の肌ハ温小肉ハ冷ク臍腑ハ熱もと同ド道理ヘ氣中萬物の生育悉く天
地の氣格小隨もとゑ是余が發明小わす諸書小散見一古人の説

凡物を視る眼力の限りありて其外を視べずすまば人の肉眼を以雪成る
一片の鶯毛のどく、うども數十百斤の雪花成併食て一斤の鶯毛を爲ヒ是を驗微
鏡小照一視きバ天造の細工する雪の形状奇と妙くさるす下ふ國もろグ如一其形の
齊々ざざかの冷際小於て雪とさる時冷際の氣運ひと一からざる由々雪の形氣小應
じて同ドくさざむとちうども肉眼のがくさる至微物也昨日の雪も今日の雪も一望
の白模糊を爲のと下の圖ハ天保三年 許鹿君の高撰雪花圖説ふ在る取雪花
五十五品の内少騰寫ゆも雪六出成爲 御説小曰「凡物方體ハ四角者必八を
以て一派圍ミ四體ハ丸を六分以て一派圍ひ定理中の定數誣へくす」云々雪を六

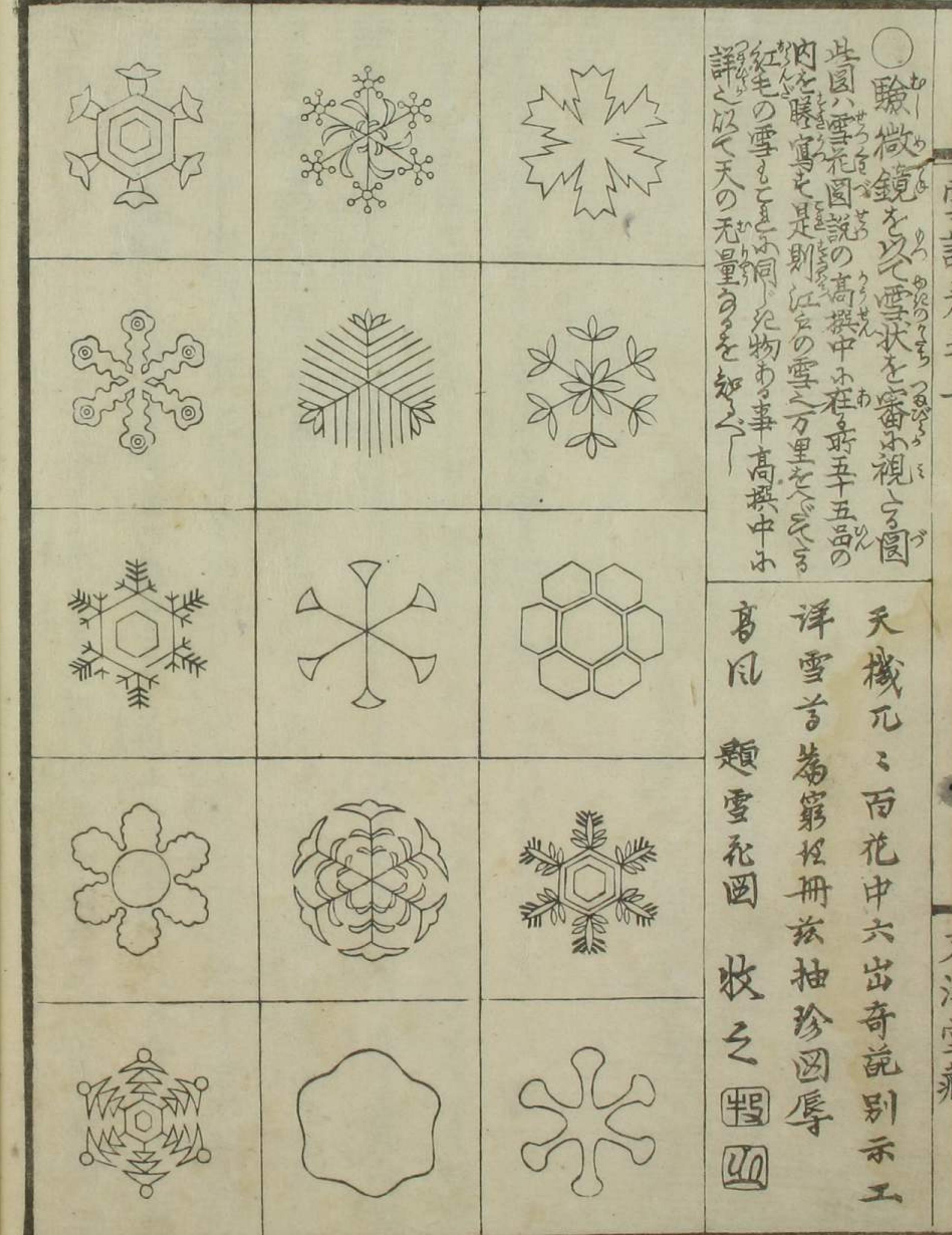
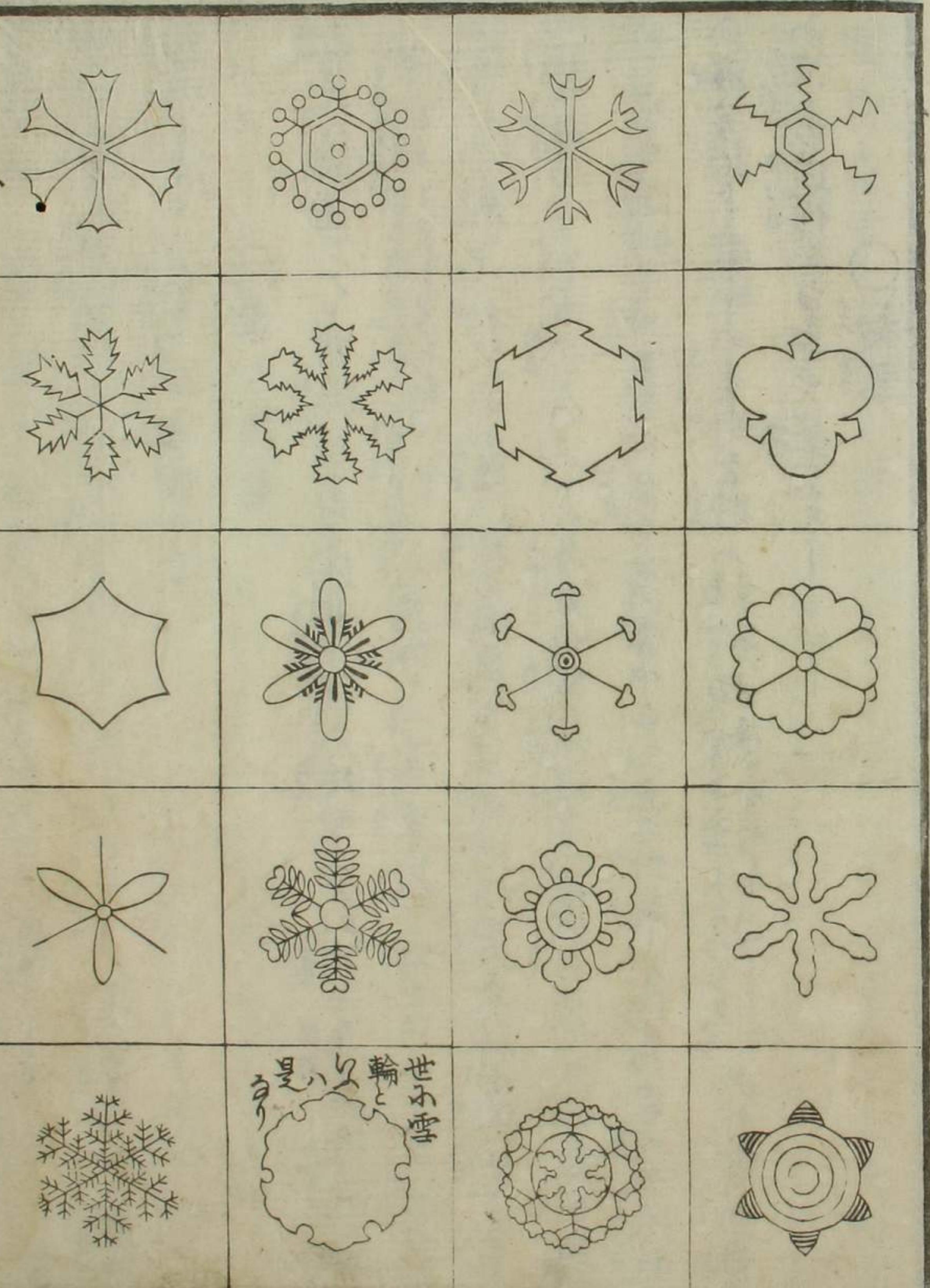
の花とある。御説を以ちべし。愚按小圓ハ天の正象方ハ地の定位之天地の氣中ふ活動する万物悉く方圓の形成失ひてその一派以ひべし人の體方ふして方々す。圓とて圓とす是天地方圓の間小生育也。天地の象法もるをさる。子の親ふ似るふ相同ド。雪の六出を所以ハ物の貞長數ハ陰半數ハ陽。人の体男ハ陽。身を九出。頭・兩耳・鼻・両手・女ハ十出。兩足・男根を九ハ半の陽。十八長の陰。亨もども陰陽和合て人代為也。男ふ無用の兩乳。女ふ不用の陰舌。あつて男ふかどる氣中ふ活動萬物此理。漏る。雪ハ活物ふわづまでも寢む所ふ活動の氣ある。名ふ六出。形の陰中或陽ふ象る圓形を具へ。もあり水ハ極陰の物。も一滴もとて時々うづび圓形をうそ落るとどうふ活く崩ある。陰ふて陽の圓をうそうする。天地氣中の機關定理定格ある。奇こ妙こ恩筆。お尽りがテ。

○雪の深淺

左傳云。隱公八年平地尺ふ盈を大雪と為と見え。其國暖地。うとバ。唐の韓愈。雲を豐年の嘉瑞。とりひくも暖國の論。云々。唐土ふも寒國ハ八月雪降。五雜組ふ。見え。暖國の雪一尺以下。山川村里立地ふ。銀世界を。雪の飄々。翻ふ。な。を観て花ふ諭。玉ふ比。勝望美景を愛。酒食音律の樂を添。画ふ寫。詞ふつて称覩。和漢古今の通例。是雪の淺き。國の樂。我越後のどく年。毎ふ幾丈の雪を視。何の樂。みづあく。雪の為。ふ力を尽。財を費。一千辛万苦。下ふ。説く所を視てかゆひなる。等。

○雪意

我国の雪意。暖国ふ均一。かく。が。九月の半より霜を置て。寒氣次第ふ烈く。九月の末ふ至。殺風肌を侵て。冬枯の諸木葉を落。天色。雲とて。日の光。絶。看ぎる。連日是雪の意。天氣。勝。朧。る。数日ふて。遠近の高山ふ白を点ト。て。雪を觀せ。むこと。万里言ふ嶽廻。と。又海ある所ハ。海鳴り。山すき處ハ。山すき。



○ 賦微鏡を以て雪状を審ふ視する圖
此圓ハ雪花圖說の高撰中小在五十五里の
内を勝寫是則江戸の雪へ万里をぐる
紅毛の雪もとて同物ある事高撰中
詳く以て天の无量うるを知る

天機元々百花中六出奇麗別示工
洋雪首輪窮極冊抜珍圖厚
高風題雪花圖收之四

遠雷の如き。あと城里言ふ洞鳴りと云ふことを聞く。雪の遠くさる
をある年の寒暖ふつて時日はまづうきし袖だけまづり。どううきりの秋の彼岸
前後があり。毎年かくのぼり。

○雪の用意

前よりすがごとく雪降んとす。商量り雪ふ損せしむ。為不屋上不修造を加
え。梁柱廂家の前の屋翼を里言ふらう。其外まで居室ふ係る所力弱いことを補ふ。雪
ふ損する爲め。庭樹ハ大小ふ隨ひ枝の曲にハまげて縛束。梢丸太又ハ竹を添へ。枝とす
て枝を強く。も雪折をゆく。冬草の類ハ疏筵を以覆ひ。包む井戸ハ小屋を懸
て。廁ハ雪中其物を荷あひ。冬備をうじ。雪中より一点の野菜もうけ。且ば室内の人数
少しき。雪中の食料を貯ふ。あたうやうふ土中ふうづめ。又ハ其外雪の用意
小ちう。雪を賣せる甚。ひ。繁花のまちう。む。所く雪國の人々を見て。雪を聞て
羨ぎ。我国の初雪を以て。こまふ比を。樂と苦と。雲泥のちがひ。そもそも。越後国
ハ北方の陰地。ひとども一国の内陰陽を前後をひく。天ハ西北。水たゞ。山東。水西
北を陰。地ハ東南不足す。水多。水東南を陽。守越後の地勢ハ西北大海。小對して。陽氣
之東南。ハ高山連りて。陰氣。之多。水西北の郡村ハ雪浅く。東南の諸邑ハ雪深く。是阴阳
の前後。もうふ似。我住魚沼郡ハ東南の阴地。ゆにて。巻機山。苗場山。八海山。牛耳
嶽。金城山。駒ヶ岳。免ヶ岳。浅川山等の高山。其餘他国。小聞。見る山と。波瀾のどく
東南。水運り。大小の河とも。縱横を。陰氣充満して。雪深き山間の村落。見べ。雪の
深を。あぐ。冬日南の方を。周。名北国。ハ。もく。寒。一家の。大。風。内。と。も。北。寒。南。ハ。あ。と。も。と。同。道理。我が國初雪を。視る。遅と速と。

○初雪

暖國の人の雪を賞観す。前よりすがごと。江戸。ゆ。雪の降る年もある。バ初雪
ハ。こ。と。よ。く。ふ。美。賞。一。雪。見。の。船。ふ。哥。妓。を。携。雪。の。茶。の。湯。ふ。賓。客。を。招。青。櫻。ハ。雪。伏
居。続。の。媒。と。う。一。酒。亭。ハ。雪。を。來。客。の。嘉。瑞。と。う。雪。の。為。ふ。種。の。遊。樂。を。み。ほ。う。枚
舉。く。一。雪。を。賣。せる。甚。ひ。繁。花。の。ま。ち。う。む。所。く。雪。國。の。人。々。見。て。雪。を。聞。て
羨。ぎ。く。や。我。國。の。初。雪。を。以。て。こ。ま。ふ。比。を。樂。と。苦。と。雲。泥。の。ち。が。ひ。そ。も。く。越。後。国
ハ。北。方。の。陰。地。ひと。ど。も。一。國。の。内。陰。陽。を。前。後。を。ひ。く。天。ハ。西。北。水。た。ゞ。山。東。水。西
北。を。陰。地。ハ。東。南。不。足。す。水。多。水。東。南。を。陽。守。越。後。の。地。勢。ハ。西。北。大。海。小。對。陽。氣
之。東。南。ハ。高。山。連。り。て。陰。氣。之。多。水。北。西。の。郡。村。ハ。雪。浅。く。東。南。の。諸。邑。ハ。雪。深。く。是。阴阳
の。前。後。も。う。ふ。似。我。住。魚。沼。郡。ハ。東。南。の。阴。地。ゆ。にて。巻。機。山。苗。場。山。八。海。山。牛。耳
嶽。金。城。山。駒。ヶ。岳。免。ヶ。岳。浅。川。山。等。の。高。山。其。餘。他。国。小。聞。見る。山。と。波。瀾。の。ど。く
東。南。水。運。り。大。小。の。河。も。縱。橫。を。う。陰。氣。充。満。して。雪。深。き。山。間。の。村。落。見。べ。雪。の
深。を。あ。ぐ。冬。日。南。の。方。を。周。名。北。国。ハ。も。く。寒。一。家。の。大。風。内。と。も。北。寒。南。ハ。あ。と。も。と。同。道。理。我が國初雪を。視。る。遅。と。速。と。

其年の氣運寒暖ふつみて均々どりどもかと初雪ハ九月の末十月の首があり
我国の雪、鶴毛をうまで降時ハクシビ粉碎をうそ風又てを助く故ふ一昼夜
小積所六七尺より一丈ふ至る時もあり往古より今年ふつみて此雪此国小降る事
タリきは暖國の人びと初雪を觀て吟詠遊興のよろこみハ夢ふもあらず今年す
又此雪中ふ在る事かと雪岱悲ハ邊鄉の寒國ふ生ずる不幸なりべ一雪を觀て樂い
人の鱗花の暖地ふ生ずる天幸を羨ましんや

○雪の堆量

余が隣宿六日町の俳友天吉孝人の話小妻有庄ふあをび一頃聞ふ千隈川の邊の雅
人初雪より天保五年十二月廿五日までの間雪の下る毎ふ用意ある所の雪を尺をりて
量りふ雪の高さ十八丈ありとぞ此話雪国の人も信ぞぐくありどもつ
らく思量ふ十月の初雪より十二月廿五日までかとその日数八十日の間ふ五丈の雪をり
四丈ふりするを隨て下バ隨て掃ふ処ハ積でる事ナキ又地ふあらず減もむる

かとをりて是をかと我国の深山幽谷雪の深さをりあひ天保五年ハ我国
近年の大雪をりしを右の話説ふべし

○雪竿

高田御城大半先の廣場小木を方ふ削り尺を記して建ゆる是を雪竿との長一丈と
雪の深浅公税小保を以てき。一高田の俳友楓石子よりの各翰小天保五年雪竿を
又とぞ當地の雪此節一丈ふ餘りとりひ来り雪竿とくを越後の事として俳
句やもえとて此國ふ於て高田の外无用の雪竿を建る處昔のちく乎今ハナリ一風
雅をりて我国ふ遊び入雪中を避て三夏の頃此地を踏むる越路の雪をあらび然るふ
越路の雪を言の葉ふ作意ゆゑたゞりあつて我国の心火笑ふべき多し

○雪を掃ふ

雪を掃ふ落花をからふ對して風雅の一つとて和漢の吟咏あまことえふと
かる大雪をからふ風雅の状ふあらず初雪の積りをそめまふおりば再び下る

雪を添て一丈ふあまるるもあまとバ一度降バ一度掃ふ雪浅けまだ是を里言ふ雪掘とのふ
土を掘どとくもるやゑふ斯りふと掘きとば家の用路を塞ぎ人家を埋て人の出べき処
もうく力強家も幾万斤の雪の重量ふ推碎んをかちとや名家とて雪を掘ざる
キ一掘る由ハ木を作りて鋤を用ふ里言ふとより木鋤と櫛との木をりうて
作る木質輕強と折る事なく且輕一形ハ鋤ふ似て又廣一雪中第一の用具と
山中の人をきを作りて里小賣家毎ホ貯ぎんキ一雪を掘る状態ハ圓ふあらへ
如一掘する雪ハ空地の人妨うれし處山のどく積上つて里言ふ掘揚とくの大家
家夫を尽してかたゞまを掘夫を傭ひ幾十人の力を併て一時ホ掘尽を事を急小為
も掘る内ふも大雪下見立地ふ堆く人力ふかゞまの多さ舉てゑけり右大家の
るをのふ小家の貪しまへ掘夫をやとべ給ふ費もまへ男女をりうぞ一家雪をりう吾里ふ
きず下雪すき处ハ皆然うり此雪いとぞくの力をつひかくやくの錢を費終日
わくる跡(その夜大雪降り夜明て又まへ元のことへかる時ハ主人はさく下人も頭
暖国のみ雪と氣運の前後かくのほど)

を低て歎息をつくのと大低雪ふごとく掘る爲ふ里言ふ一番掘二番掘とふ

○休雪

春の雪ハ消ゆをりうて休雪との和漢の春雪消ゆとを詩哥の作意とそ是暖
國のやく寒国の雪ハ冬を休雪とものべりんとくまび冬の雪いとぞくのりうても凝
凍ことく脆弱うるや游泥のとく故ふ冬の雪中ハ機縫を穿て途を行里言ふ
雪を漕とり水を拂ふ状ふ似るやゑみや又深田を行ふとあり初春ふくまを雪
悉く凍りく雪途ハ石を布するごとくまび往来冬よりへ易り(徒歩するあふ下敷の
えく あくまき きく せんご)此時ハ里人五十人を傭ひ縄縛みて道を踏闊セ跡ふ隨て行此費幾緒の錢を費む

○雪道

冬の雪ハ脆きやゑ人の踏固づる跡をもくへやまけと往来の旅人一宿の夜大雪降
ふとくある一条の雪道雪ふ埋り途をもくへやゑ郊原あひうて方位をきくちぐに
此時ハ里人五十人を傭ひ縄縛みて道を踏闊セ跡ふ隨て行此費幾緒の錢を費む



京水筆

一人家の雪を掘る事本
文ひるぎと一 雪をやりて
洞のとくは棚も墓もこな
雪を作り物を賣ることをす
やとの三圖中山の如くす
所の雪あり

理家太雪廢年
恨天梅柳未在
朶代唐妍
鈴木牧之題

驛中積雪之圖

ゆゑ貧しき旅人ハ人の道をひくを待て寧く時を移もあり健足の飛脚とりども
雪途を行ハ一日二三里ふ過ぎ撓めて足自在かす雪膝を越をゆゑて冬の雪中一ツ
の歎難ニ春ハ雪凍て鏽石のどくさまば雪車又雪舟の字を以て重を乗を里人ハ雪
車不物をのせひのきものりて雪上を行ひ舟のどくを雪中ハ牛馬の足立ざるゆゑもべ
セリ雪車を用ひ春の雪中重を負ししるす生馬小勝る種あり大うそ猶羅ヒシ雲国便
利第一の用具ニちまども雪凍りする時ふわくざまば用ひぐ一也多千里人雪舟途と
唱ふ

○雪蟻

凡雪九月末より降をしれて雪中ハ春を迎正二の月ハ雪尚深一三四の月ふ至りて
次第不解五月ふいにて雪全く消て夏道とう年寒暖不至りて四五月ふいまと春の
花がむ一時ふいへくさまば雪中ふ在るすア凡ハヶ月一年の間雪を育ざるす僅小四
月ふまども全く雪中ふ蟻え半年をあくを以て家居の造りハさく一萬事雪を禦

ぐを専と一財を費力を尽きて紙筆小記一ぐ一農家ハとまつ夏の初より秋の
末まで五穀を收るゆゑ雪中ふ稻刈りあり其たまつやの千辛万苦暖国の農業小
比をまど百倍ニまどと雪国ふ生る者ハ幼稚より雪中ハ成長をゆゑ蓼中の農卒を
もくびうごとく雪を壅ともあらびうへ暖地の安居を味ざるゆゑニ女ハさくと男モ十人小
七人ハ是ニあらまども住バ都とぞ繁花の江戸奉公もす年ありて後雪国故郷不般
る者あきも又十人あて七人ニ胡馬北風ふ嘶き越鳥南枝ふ葉ク故郷の忘がまハ世
界の人情ニキテ雪中ハ廊下ふ店下雪垂をかやかてあまう下ー雪吹をきく窗も又
こまを用ひ雪をくずす時ハ巻て明をとす雪下すや處うす時ハ積る雪家を埋て雪と
屋上と均く平ふきり明のとくぎ处々く畳も暗夜のどく燈火を照して家の内ハ夜
畳をわくす漸雪の止る時雪を掘て僅ふ小窓をひき明をひく時ハ光明赫奕する
佛の国ふ生すらむか此外雪篠りの銀難さめぐあきどごく一けまをあらうす
鳥獸ハ雪中食无をあて雪浅き國去るあきど一定すチ雪中ふ篠り居て

朝夕をまわしのへ人と熊と

○胎内潜

宿場と唱所の家の前か庇を長くのびて架る大小の人家をさかのどへ雪中へ
きゆく平日も往来とまどふより雪中の街用をまづ人家の雪をとてお積次
ぎて重て両側の家の間か雪の堤を築すが如くこゑ於て町の雪の洞をひき庇より庇
翁の本義は妻妾の宿外の家の繞ぎ處ハ庇翁にバ高低をきよるかの雪の堤を往来
奸淫をのひふ通ふことを里言ふ胎内潜と云ふ又間夫ともいふ間夫と云ふ金媒の方言うを借て用ひと
とその足立ぐを除わまば一条の道を開き春ふいづる雪堆き所へ壇層を作りて通
路の便と形画階のごと一所の者へとまどを登下する脚慣て一歩もあまうゆう
他國の旅人を怖りて移歩かうて落す者ありかつまば雪中み身を埋む視る人ハ
てまどを笑ひ落すものへとまどを怒るから難所を作りて他國の旅客を勞へしもす
求す所為ふあくま此雪を取除ともせんや人力と錢財とを費せぬす導ハ壇城

作りて途を開くこそもく初雪より歳を越す雪消すまでの年経繁細不記さば小冊
みへ冬へとてゆきふ省てあまう事甚多

○雪中の洪水

大小の川ふ近き村里初雪の後洪水の災ふ苦むすあり洪水を此國の俚言ふ水
揚とりふ余一年閑との隣驛の親族油屋が家ふ止宿せ一時頃ハ十月のとぞり
ゆく雪八九尺つりて下をうきうき夜半よりて近隣の諸人叫び呼りつ立
騒ぐ声ふ睡を驚一そ何事やんと曾もをどうて卧す間をえぞのけまば家の主兩
手ふ物を提水もぐりとまく裏の掘揚立退めといひまどを持ち物を二階運びゆく
勝手の方立てて下をまどを家内の男女狂氣のどく駄まどて家財を水ふ流さドと
てあす手當もどくふ取退了水ハ低ぶ隨て潮のどくがまく已ふ席を浸す庭が漲る次第
ふ積する雪所とて雪うござへう雪光暗夜を照して水の流るあつまちあつま
いもんをとす余人ふ助けまきて高所ふ逃登り邊の驛中を眺バ提灯炬を燈つ

大勢の男ども手こ木鋤をとげ雪を越水を涉て声をあげてふ来るあまく
水揚せざる所の者どもてあ馳あつきて川筋を閑き水を落まんとむと闇夜ゆく
をぐべえとど女童の泣叫が声或ハ遠く或ハ近く聞もわんとのあくまく燃
残りくす炬一つをなづるふ人も馬も首だけ水に浸り漲るうづきをやくす馬を助
んとくとく帶もせざる女片手み小児を脊負提灯を提て高處逃のがへ近けよ
そくあくまふスモ命とつりぐちをも耻へかひべくば可笑事
可憐うす可怖まゆ種くまゆ筆ふ尽うごとやうく東雲の頃ふ至り
て水も落すと諸人安堵のありひをうすぬ。そもそも我郷雪中の洪水大くべ
初冬と仲春とふあり此閑とく驛ハ左右人家の前ふ一道での流あり末は魚野川
落き三伏の旱ふ乾くふやうに清流水くゆゑふ家毎ふ此流を以て井水の代りと
あとも桶ふても汲び死流ふまむ平日の便利井戸トクももくふ勝りあくま初雪の
後十月のこうまでふあの二條の小流雪の為ふ降埋らき流水ハ雪の下ふあり故

ふ家毎ふ汲き程ふ雪を穿て水用を弁すこの穿する所も一夜の雪不埋らきを
あまくと再うぐふ屢々人家ふちうに流さかくのどくうきばこの二條の流の
水源も雪ふ埋き水用を失ふのみうべ水あぐの懼あるやゑ所の人力を併て流
のかくロの雪を穿みうきとふも人毎ふ業用ふさくと時を失ふ又ハ一夜の大
雪ふかの水源を塞ぐ時ハ水溢て低所を尋て流る驛中ハ人の往来の為ふ雪を踏
て低也ゑ流水漲り来り猶も溢て人家ふ入り水難不逢ふす前ふりうごと
幾百人の力を尽して水道をひくざまバ家財を流す或ハ溺死ふかももあり。又
仲春の頃の洪水ハ大くと春の彼岸前後に雪ひまく消す山ふかく田圃も渺々
と曠平の雪面うきと枝川ハ雪ふ埋き水ハ雪の下を流す大何とりども冬の初う
岸の水まづ氷りて氷の上ふ雪をつむせつむ雪もかく氷りて岩のこく岸の
氷りう端次第ふ雪をつむりのちふ両岸の雪相合て陸地とおうト雪の地と
うきと春を迎て寒氣次第ふ和ぎその年の暖氣ふつまて雪も降止する二月



の頃、氷氣、地氣よりも寒暖を知るやうきの氷面が積りて雪下より解く凍り、雪の力も水みちうに弱く、流は雪ふ塞まで狭くうへてゆゑ水勢すも烈々、陽氣を得て雪の軟う下を潜り、漫のまきがごとく障ふり、寝耳ふ水の災難ふあひて雪中の洪水寒國の艱難、暖地の人情ぬり、右ハ其一をりの雪中の洪水地勢ふよりて種々各々あり詳みハ弁トドケテ

○熊捕

越後の西北ハ大洋ふ對一て高山、東南ハ連山魏として越中上信奥羽の五箇國ふ跨り重岳高嶺肩を並び數十里をうねり、大小の獸甚多。此獵雪哉避く他国去もありきる者もあり動びて雪中穴居ちり、熊のと熊膽ハ越後を上品とし雪中の熊膽、こときく、價貴し其重價を得んと欲して春暖を得て雪の降止するこう出羽あたりの臘師ども五七人、心を合せ三四匹の猛犬を牽き米と塩と鍋を貯(水と薪)、新山中、在る小隨く用をさへ山より山を越登、獵て獸を食

ト、夜ハ樹根岩窟を寝所とす。生木を焼て寒を度且明とす。着こよすゆく寝卧をうへ頭より足ふへるまで身小着る物悉く獸の皮をもつてことを作る遠く視きく猿ふて顔人也。金革を袴みたとかゝ人をやひ、乞ひ者り、志所、我国の熊ふあひみて我山中入り場所とまを見立木の枝藤蔓を以て假小屋を作りこきを居所とす。かのぐれ、犬を牽四方小別く熊を窺ふ。熊の穴居す所を認バ目識とのうて小屋不く、一連の力を併せてことを捕る。道具ハ柄の長さ四尺半りの手鎗或ハ山刀を難刀のごとくふ作り、の鎌、炮、山刀斧の類と刃鉋る時ハ軒てす。砥をもつて自研ぐ。此道具も獸の皮を以て鞘ともうし、此者ら春ふもかまらず冬より山に入らざりもあらず。

そもそも熊ノ和獸の王猛くして義を知る葉木の皮虫のるを食とて同類の獸を攻め、画を荒ぞ稀ふ羞をく食の尽る時、詩經や男男子の祥と/or六雄將軍の名を得るも義獸と云ふ。夏ハ食をりとりの外山城を掌中ふ襟着冬

の巣、蟻あへこまきを撲て飢を凌ぐ牝社同く穴小蟻らば牝の子あハ子といひ
ト。未咸蟻も所へ大木の雪頬ふ倒きそ打ち洞下不ち又ハ岩間土
穴うまく心ふ隨て居る處さうめぐ一雪中の熊へ右のどく他食を求ざるやゑその
膽の良功ある夏の膽ふ比き百倍。我國生て。飴膽・琥珀膽・黒膽と喟色を
もくこきとり琥珀を上品と。黒膽を下品と。偽物黒膽ふ多。

●さて熊を捕ふ種々の術あり。かまく居所の地理ふぞうて捕得せを。術をねどく
熊へ秋の土用より穴ふ入り春の土用ふ穴より出るとの又一説ふ穴ふ入りてより穴を
出るまで一瞬小袖もとの人の視ざるとぞううまで信づ。

沫雪の條ふりて冬の雪軟ふ。足場あたひ。熊を捕ハ雪の凍る春
の土用まへくまく穴よりてんとむる頃を程よき時節ともる。岩壁の裾又ハ大樹の根
うどく巣蟻を捕へ壓とくの術を用ふ。天井釣とすりの製作ハ木の枝藤の
蔓みく穴ふ倚掛て棚を作りたる端ハ地ふ付ア杭を以てことを傳りたるの

横木ふ柱ありて棚の上ふ大石を積うべ。横木より繩を下。繩小輪を結ひて
穴ふ臨そくまを蹴綱とり。此蹴綱ふ轉機あり。全く作りをうつてのも穴ふのぞん
で玉蜀黍艸の茎のる。熊の惡む物を焚あまく。小扇く烟を穴ふ入まく。熊烟りふ
喰て大ふ怒り穴を飛出る時かうべ。蹴綱ふ轆ろま。轉機ゆき。棚落て大石
の下ふ死を手を下さ。一熊を捕の上術。是ハ熊の居所ふよることまく。雄夫を
折ふよへてあまく。

又熊捕の場數を踏む剛勇の者、一連の獵師を熊の居る穴の前ふ待せ己一人
ひろく蓑を頭より被り。鷹とり。櫛師常ふて。穴ふをうそと這入り。熊ふ
蓑の毛を觸り。熊はまの毛を嫌ふ。ゆゑ除て前ふも。又後よりまの毛を障る
熊又まふをも。又まうり。又まんじ。熊終や。穴の口ふひることを視て待かまく。うる
れしも手練の鎗尖ふうけて突齒。一鎗失とまの熊の一揆ふ一命を失ふ。の危を
踏ぐ熊を捕。僕の黄金の爲。金慾の人を過す。色慾よりも甚。さまで黄金ハ

道を以^ミえ得べし道をも^ミえ得べし

又上山行^カす所ありとて下ゆ雪のつゝむさを知り土穴を掘^ケて蟻^{アリ}もあり然^シもてふも雪三五尺ハ吹積^{キツク}く熊の穴ある所の雪あへまく細孔ありて蟻のことを^{シキ}熊の氣息あく雪の解^{スル}孔^ノと^シ獵師^{リツシ}をまを^シまで雪を掘^ケて穴をあらわ木の枝葉のまゐを穴ふ捕^キ入^ムて熊と^シを揆^{ハシ}とて穴かへまるやう^ハあらわ木穴遍りて熊穴の口あらづ時鎗^{ハグマ}ふから^ハ突^キさうと^シま^ハ數足^{ハシヒキ}の猛犬^{ハシヒキ}もどふ龜^{カメ}がくて齧^{ハサ}つ^ク大ハ人を力と^シ一人ハ犬を力と^シ殺もあり此術ハ控木^{ハシヒキ}ふたりするふをちるゆゑ

○白熊

熊の黒^ハ雪の白^ハ天然の常^ハ天公機^ハを轉^{ハシ}じて白熊^ハを出せり○天保三年辰の春我^ハ往奥沼郡の内浦佐宿^ハ在大倉村の樵夫八海山^ハ入り時^ハりふして白き兎熊^ハを唐^カり世^ハ珍^シと^シ飼^{ハシ}ひき^ハ小奇具師^ハ江戸ふじふ見世^ハの

こ^トを買^ハて^シ市場又^ハ祭礼^ハ人の群^ハ所^ハりて^シ有^シ物^ハせ^ハ一^ハ大^シ有^シ所^ハ余^モつんづ^クふ大^シ狗^ハこと^シ状^ハ全^ハ熊^ハ一^ハ白毛雪^ハ欺^キあ^ハも光澤^{アリ}て天鷲織^ハごとく眼^ハ紅^シくよ^ク人^ハ馴^シくもろ^シて愛^{ハシ}べにの^シて^シか^ハニ^シ持^アあるき^ハ一^ハ白^シ絹^ハ終^ハをも^ハ白^シ龜^ハ改^{ハシ}元^シ白^シ鳥^ハ神瑞^ハ幡^ハ鳩原家の旗^ハ白^シま^ハ皇^シ國^ハ祥^シ象^ハ天^シ機^ハ白^シ熊^ハい^{ハシ}き^ハも^ハ昇^{ハシ}平^シ万^シ歳^ハの吉瑞^ハ山^シ家の^ハ人の話^ハ不^シ熊^ハ殺^シて^シ二^ハ三^シ足^ハ或^{ハシ}以^{ハシ}年^シ歴^{ハシ}一^シ足^ハを殺^シ也^シ其^シ山^シ家^ハも荒^シる^シあり山^シ家^ハの^シこ^トを熊^ハ荒^シと^シこの^シ小^シ山村^ハの農夫^ハ鬻^シて熊^ハを捕^{ハシ}す^シと^シ一^シ熊^ハ靈^シあり一事古書^ハも^シえ^シり

○熊人を助^シ

人熊の穴^ハ隊^シ立^タテ^シ熊^ハ助^シら^シて^シ諸^シ書^ハ小^シ散^シ見^シま^シ其^シ實地^ハを^シか^シ人^ハ語^{ハシ}り^シ珍^シけ^シと^シ小^シ記^シ○余若^シり^シ時妻有^シの庄^ハ奥沼郡の用^{ハシ}ありて兩^シ三^シ日逗^シ當^シ事^ハ有^シに頃^ハ夏^シうり^シや^シ客^シ舍^ハの庭^ハ木^ハづ^シふ

筵を事處（じゆ）納涼居（のうりょう）小主人ハ酒を好む人モ酒肴（さけう）をてふ閑き余ハ酒を
燭（ろう）木を喫（く）て居す（ゐ）一老夫（おじふく）てふ来り主人を視て拱手（うしゅ）て礼をぬ
後園（ごゑん）行んとせ（とせ）を主呼（あいあび）とあ老夫（おじふく）を指す（さす）ゆ此叟父（おじが）父年時能（のぞ）不助（ふすけ）られ
う人（ひと）危き命（あきめい）をなそり今年ハ十二まで健（けん）か長生（ちやうせい）もるハ可賀老人（からじん）ニ識面（ちゆげん）
ありゆ（とひ）ふ老夫莞爾（わんじる）とて再奉（さめい）んとし余よびとくら熊（くま）不助（ふすけ）らま（ま）と珍（ちゆう）
説く語りて聞せゆ（とりひ）と主人余（よ）前（まへ）在（あつ）茶盤（ぢやはん）をとくとまべ一盃（いつぱい）燭とも
酒を滿盤（まんぱん）とつきけま（らうふわらうち）老夫筵（おじふくわらうぢやん）の端（はたけ）小坐（こざ）酒を視（み）笑をふくと続（つづ）く三盃（さんぱい）を
歎（たん）言鼓（ことづの）て大小喜び（ちうし）びきく話説（はなせつ）すきん我（わ）廿二月（にじゅうにがつ）の下（くだ）薪（こな）をとくらんと
雪車（ゆきぐるま）を引（ひき）て山（さん）ふ入り（いり）ふ村（むら）ふちうに所（ところ）へ歸（かへ）つゝとよもくあるも足場（あしざま）わづれ
や名山（めいさん）重踰（ひどくこゑ）つゝふ薪（こな）ととく榮あま（さか）ありーめゑ自在（じざい）ふ伐（は）とく（とく）雪車（ゆきぐるま）哥
うひうう（あづかひな）徐（ゆき）束（つづき）雪車（ゆきぐるま）ふ積（のづ）く縛つけ（のづけ）山刀（さんとう）をさ（さ）のき低（ひさ）小隨（おまわ）今來り（きこり）
方（ほう）乘下り（のりこり）ふ一束（つづき）の柴雪車（ゆきぐるま）より轉（まわ）ひ落谷（おちや）を埋（うぶ）てる雪の裂隙（けい）ふたをまくり

凍り（こおり）一雪陽氣（せきようき）を得（と）たるゆゑ捨（す）て飯（めし）も惜（惜）しがとの所（ところ）ふりてり榮の枝（えだ）
手（て）をうけ引（ひき）上（あが）んととくふをと（と）も動（うご）ふ落（おち）て勢（ぜい）ふ撞（うつ）りき（き）るうくんま（ま）べ重
き下（さ）り引（ひき）上（あが）んと匍匐（ふく）て双手（ふたてん）を延（のば）ー声（こゑ）うけく上（あが）んとあつて時足（ときあし）ふ蹠力
きれやゑ（ゑ）のきぶわくら（わくら）小己（わたくし）が躰（つつみ）を轉倒（じょとう）雪の裂隙（けい）より遙（とほ）の谷底（たにそこ）墜（おち）けく
雪の上（うへ）を濶落（おちおち）するゆゑ幸（さいわい）ふ癒（癒）ひきぞま（ま）ー夢のやう（よう）て（て）がやう（やう）くふ心付
上（うへ）をとくまゞ雪の屏風（びやうふう）を建（た）てりふ谷底（たにそこ）の雪中寒烈（ゆずのひんれつ）ー手足（てあし）も龜手（かめて）
さうくふーて空（そら）を見（み）す所（ところ）ひづりふ谷底（たにそこ）の雪中寒烈（ゆづのひんれつ）ー手足（てあし）も龜手（かめて）
生（なま）る心地（こころぢ）はうく暗（くろ）ーせめて明方（あけがた）ふりぞんと雪ふ埋（さめ）る狹谷間（せきこま）をつひ
一步（いそぎ）もとくびぐくかくてへ凍死（とうし）べーと心を励（はづ）ー猶途（よと）もあるくと百歩（ひゃくほ）をぐり行
うけん滝（たき）ある所（ところ）ひづり四方（よのう）をとくふ谷間（こま）の途極（ゆきき）てく雍（おう）ふ落（おち）る鼠（ねずみ）のどく
せんまく暗（くろ）惆然（ちうぜん）とくゝ胷せまくいふせんとりふ思案（しわん）き出（で）ぎりたそ
是より熊（くま）の詰（くわ）今一盃（いつぱい）まづべーと自酌（じしゃく）てもまくふ喫腰（くわい）よう烟艸佈（えんそうふ）を



火を吹きどもやゑ其次ハリテトゾヅケバ差父曰モレ傍を見まば
宿泊の岩窟あり中少く雪もあたへぬひて又ふとて温く此時も
腰をさゞりと小握飯の弁當もつゝかくへ飢死を免一
さうかく雪と喰ても五日や十日、命あつて一その内より雪車哥の声まで聞ま
村の者と大声あげて叫らば助く金べそまづけても伊勢さゑと善光寺さゑを
かのミヤーよりやうやくとあまくか念佛唱へ大神宮をいのり日もこまかにしゆゑ
うと寝所わせまやと闇地を探り一這入りて又小次第小温と猪も探り一手先
ふ障へ正一熊懼然と胷も裂るやうに逃ふ道をくそも命の期う
死も生も神佛小まうせと覺悟をきらり小熊の我ハ薪こうふ来り谷落
すの飯や道がく生て居やハ喰物がくと死んで命を壁て殺ばらり
情あべ助なしと怖く熊を抜けまぐ熊へ起りやうやうてありしがあ
一ありてちまいで我を尻あてがすや熊の居る跡坐ふちみあつてうす

予巨健ふあつてごとく全身あつまつて寒をうなぎてやく熊ふきめ禮を
のべ猶もなまけ玉と種く悲れたりをりへふ熊手をあげて我ハ柔ふい
のてるやなびくとゆゑ残の子をもひて一誠くともとばくてもと一苦一堺
りふきらむまぐ心爽ふきり咽も潤ひ一ふ熊へ鼻息を鳴りて寝やうとまく我を助
きんと心大ふきのちハ熊と脊をうゞく野一宿の子をのまきひて眠氣も
つじあひてのもひりつ寢へようかくて熊の身動をあつて自らてまくべ穴の
ロツキやゑ夜の明るめあり穴をあひだりやうるぎ道もあう山ふのび。べき
藤づるゆゑもあるとあらこちえども一熊も穴をうて瀧壺ふうて水をの
一時一ドみて熊を見まぐ犬をさつておやどの大熊ニ又りとの窟(もつり)イエ
お窟の口ふ居て雪車哥のことをもんと耳を澄てて聞居つて瀧の音のみ
のうの音もまづと月をむすく暮と又穴ふ一夜をあつて熊の掌ふ飢を
まのじ毎日とてすも哥ひきだとのひ袖まゆりんをまこと熊ハ次第小剣

可愛らしく語り主ハ微醉老夫も其熊ハ牝熊でござりしこ三
 入来ひは又酒をのませ盃の献酬ふゑとく話消るをも強て下団をなづけ
 た夫曰人の心ハ物ふよきわがるものこそトモ熊本達一時がもや死地すと覺悟を
 まつて命も惜くゆきりしが熊本助らまのちハ次第ふ命をくくり助る人々
 とも雪まく消え木根岩角小縫てうりと宿へらんと雪のまゐりをのこまらじび幾日
 とのふ日まく忘て虚くてもあらぐ熊ハ飼大のやうふうりとすだり人間の貴ひを知り
 谷間の急雪のまゐり里より遙くまで日のこうそのかまきりありふ一日齋の口の
 日のあらす所か蟹を捕て屠つて時熊窟より袖を垂て引くをいふと人間の貴ひを知り
 われふとしら薄落つてかねふりて熊前ふもとて自在ふ雪を揆掘一道の途をひ
 らく何方までもとぞひせば又途をひらく人の足跡ある所ふりて熊四方を
 顧く走り本て行方をまどひて我を導すたゞと熊の本一方を遙拝うむく礼を
 のあまきまく神佛の御蔭をよみ伊勢さる善光寺さみと遙拝うむくて足の

踏所もあだ火點頃宿(ひよげ)ふ此時近所の人々あつまリ念佛でやつて兩親
 あづめ愕然せまき靈氣もんと立まくべのち月代ハ蓑のやうふのび面ハ流
 のやうふ瘦(ひそ)く幽(ひそ)々立まくものちハ笑とくして兩親ハまく人まくうごび
 薪(ひのき)とふらで一四十九日ヨリ待夜(まわらひ)とてゆきとくの佛事も俄(おは)れでて酒宴(さけん)とく
 と仔細(こまち)ふ語りハ九室門(くじゆもん)とひひ小間居(こまか)の農夫(のうぶ)まき其夜燈下(よしのば)小筆(こひがき)をとり
 て語りまきを記へまき今ハむくとうりけり

○雪中の虫

唐土蜀の峨眉山(ひざきやま)夏も積雪あり其雪の中ふ雪姐(せうぢ)とあるす山海經(さんごうきょう)ふえ
 えたり唐土書此說空(さうわう)も越後の雪中ゆる雪姐あり此虫早春の頃(まき)より雪中ふ生
 雪消絶(せうせうぜつ)ハ虫も消絶始終(ふしおう)の死生(しおう)を雪と同(おな)じ字(じ)を字(じ)名(めい)と
 言ひ此虫の類(たぐい)人を蟻(アリ)とある蜂(ハチ)の類(たぐい)雪中(ゆきゆう)の虫(むし)姐(せうぢ)とあるす雪姐
 ハ雪中の姐蟻也木火土金水の五行中皆蟲(むし)を生(う)む木の蟲(むし)水の蟲(むし)ハ常(つね)に見(み)る所(ところ)

わしのど蠅ハ灰より生ず灰火の燼末をもとて蠅ハ火の虫ニ蠅を殺して形あるの灰中
あらゆる處にて蚕ハ人の熟より土を熱ハ火より生する虫也又小蠅も蚕も共に暖うて成
すも金中の虫ハ肉眼ふかよどむ冥塵のどを蟲也又人手をもとて金の虫眼を銅鏡の腐
すもぬい虫を生んだ虫の生す所色を変じて虫を拭ハ虫をころをめ其所腐を鏽
ハ腐の始鏽の中をうばひ虫あり肉眼ふかばざり又人あまきの金中猶蟲あり雪中
思無んやあまどる常をあまきば寄と妙とて唐元の畠みを記せり我越後の雪蠅
ちひまたテ蚊の如一此蟲ハ二種あり一つは翼ありて飛行ツハ正称あまとて藏く蚊行共
ふ足六つあり色ハ蠅ふ似て淡く黒其居る所ハ市中原野蚊ふもうトもども
ふ足六つあり色ハ蠅ふ似て淡く黒其居る所ハ市中原野蚊ふもうトもども

○雪蠅の圖



▲自在を
又奇と
蒼色
説を俟つ

○雪吹

雪吹ハ樹うどね積りテ雪の風が散乱をひく其状優美りのや氣化のちを
是ふ比して花雪吹とのひく古哥ゆもあまうえをす是東南す雪の国のみ
北方丈雪の国我が越後の雪深とての雪吹ハ雪中の暴風雪を巻騰騰之雪中第一
の難美ことをあら死むる人年々を一を挙ててふ記一寸雪の雪吹のやまに記を
觀人の為小丈雪の雪吹の愕然を示也

余が住富澤小遠きる村の農夫男人あり篤実不そて善親不仕ふ廿二歳の冬
二里あまり隔る村より十九歳の娘をむづへふ容姿憎くべ生質柔軟て家織
の伎も伶俐もとば男姑も可愛く夫婦の中も睦く家内可悦春をむづへ其年
九月のをより安産一てあらず男子すありとば掌中小珠を得る心地ゆく家内
生産婦も健不肥立乳汁も一子不餘るなどとば小兒も肥太り可賛名を
つけと千歳を寿けり此一家の若主て篤実をもて耕織を勤行小農夫もど

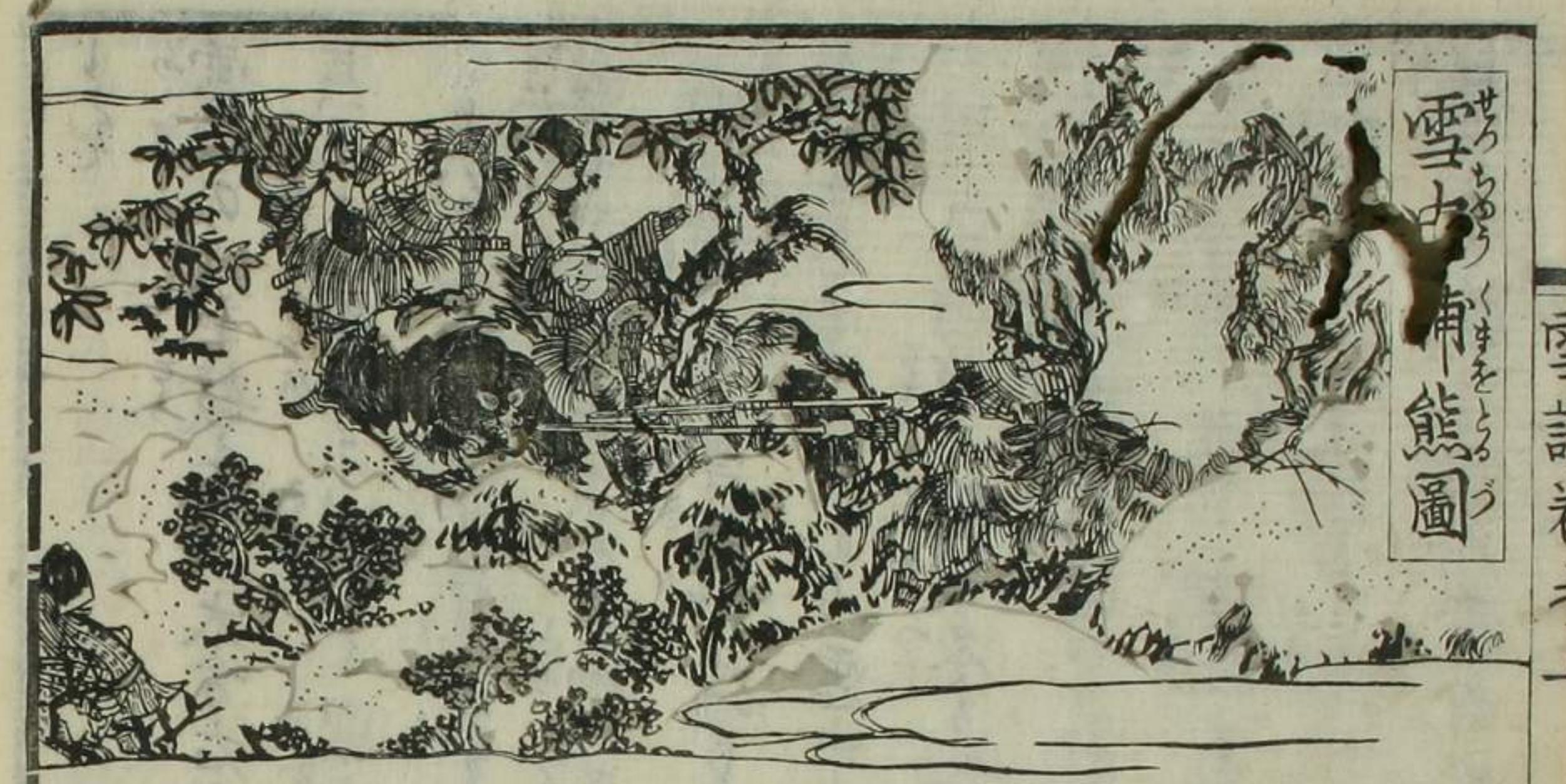
も貪り善男をひら良姫をひく好孫をまうけうと一村の人々常め羨み
かゝるが家ふ天災を下すハ如何ぞ○かくて産後日を歴てのち連日の雪
が降止天氣穏き日姫夫ふむひ今日へ親里へ行んとあひいふやせんとふ湯
旁小ありてとへぬすと男も行ア実母も孫をアセマトロコジセ夫婦とく自
慢せ下すといひ姫はうち多きつ始ふかくとリハ姫ハ俄ふ土産など取とるゝ間小姫
髪をゆひきどして臂の衣類を着し綿入の木綿帽子も寒國の習とて見ふく
うべ児を懷ふいだ入んともるふ姑亭よりよく乳を呑せそひだいまとよ途ふ
てハ孫ん孫のまくわんと一言の詞ゆも孫を愛む情じまくまろ夫ハ蓑笠
藁脚衣ぞんべを穿(晴天ゆも蓑を着)、土産物を輕荷小擔び両親小暇乞をゆ
夫婦袂をつゝ祥喜躍て立出ケリ正是親子が一世の別と後の悲難とばかり
けり○さうやど小夫ハ先不享妻ハ後不享とつまふりふ今日ハ頃月の
日おこづくこそかひひこちとす今日夫婦孫をつゞく来るべと親たちハまく

毛玉ふすド孫の顔を見玉ひまぞうりよろとびあやんまとばふひ父翁ハいわ
ぞや來りきとゞ女人ハひまざ赤子を見なばすゆゑことまづの喜悦うん達
うづバ一痛でもよろんく節も痛ぬ不可也二人とまづうバ兩親樂ぬひんこまハ
飯づゝうどをゆ一の間児の啼ふ乳房くませつうちつまで道をひだ美佐嶋
ひふ原中不到一時天色條急不寢り黒雲空ふ覆ひけまば是雪中夫室を見ゆ
大い驚怖(かづき)て雪吹きんいきせんと踉蹌うち暴風雪を吹散す巨濤の岩を越
るうごとく(つるぎ)脣雪を巻騰て白竜峯ふ登がごと一朝(のど)うとまきも掌をうもひとく天
怒地狂寒風ハ肌を貫の鎗凍雪ハ身を射の箭(のぞ)夫ハ蓑笠を吹とまき妻ハ帽子を
吹りまき髪も吹とまき吐嗟(あひ)とく間小眼口襟袖ハまく(のぞ)も雪を吹いと全
身凍呼吸迫り半身ハ己ふ雪不埋めらましへ命のきりうまび夫婦声をあげ
かひと哭叫(あひまき)ども往来の人もく人家ふも遠けまび助る人多く半足凍て
枯木のことく暴風ふ吹僵(あひまき)夫婦頭を並て雪中不倒(あひまき)死けり此雪吹其日の

雪吹の人を殺す大方右山類も暖地の人花の散ふ比く美賞もす雪吹と
其異こと潮干ふ遊びく樂と汽濤ふ漏て苦との如一雪国の難美暖地の人
ちゆひもるア連日の晴天も一時ふ寢へんて雪吹とうへ雪中の常ニ其力樹を
抜屋を折人家こまぶ爲小苦むすり放拳げんて雪吹小逢あう時ハ雪を摑身を
其内ふ埋まいとば雪暫時ざいじふつり雪中ハハうつて温あたる氣味ありて且氣息を漏ろう
死をまぬぐまゆりあり雪中を赤あからむノ陰囊いんのうを綿わたそつむすりをモモラセざれ
バ陰囊いんのうまづ凍こごて精氣尽つくしく又凍死こごるを湯火ゆかをゆづて温あたまバ助するすりあまと
も武火たけ熱湯ねつとうを用もちべて命いのちをもたらするのも春暖しゅんあたみとば腫病しゆびとまづ
良医りょういも治ちて冷死れいするまづ塩しおを熬あわて布ふを包いまく膝ひざをあくすめ稿火ごうび
よもぎよもぎをもて次第じだいふ温あため助すりよるのち病びょうを癒いせば人肌ひとはも温あたむ手足しゆそくの
凍こごるも強き湯火ゆかもあくすむとば陽氣ようきつまざとば灼傷やけどのごとく腫しゆつひふ膚ふ



京水筆



雪中甫熊圖



農人夫婦逢雪吹圖

て指を、とも百薬功うへことを我見る所を記す。人ふ示も人の凍死するも
辛足の龜手も陰毒の血脉を塞ぐのを俄小湯火の熱火を以て温め、人體の氣
血をなまけ陰毒一旦ふ解ると（ども全く去ぞ）陰ハ陽ふ勝ざるを以て陽氣
至バ陰毒肉小量て腐る寒中兩雪小歩行て冷る人急ふ湯火を用ふべ
己が人熱の温うへりをもつて用ふべ長生の一術う。

○雪中の火

世ふ越後の七不思議と称する其一蒲原郡妙法寺村の農家炉中の隅
石臼の孔より出る火人比奇とて口碑ふつゝ諸書ふ散見也。此火寛文年
中始て出一と曰記ふええと三百余年の今ふからて絶るやうきへ奇中の
奇と天奇を出をゆ一奇と云ひナド國の魚沼郡ふ又一つの奇火を出せり。天
公の機状の妙法寺村の火と云ひナドすと彼ハ人の智所是ハ他國の人の考
らぎ。所うきばてふ記て話柄とく

越後の国魚沼郡五日町より驛ふ近き西の方ふ低き山あり山の麓小小溝在
天明年中二月の頃ちのやとうふ童どもあつまつてまぐの戯をするて遊倦
木の枝をあつめ火を焚てあつめをりふ其所よりもとてまづて別小火
燄と燃わざりけり。見曹大ふいをもて四方ふ逃散けり。中ふ一人の童
家ふうり事の仔細を親ふ語るふ。此親心ある者坐て所ふいづる火の形
状をうかがひまざ消ざる雪中ふ手を入ればれをうれり。三四寸の
上ふ火燃る熟観むとて正しく妙法寺村の火のあつてと答ふ。石
をへきてこまを消す。家ふうりて人ふ語ぞ。雪まつてのち再びの所ふいづて元
ふ火りゆえ。小溝の岸に火燄をみて。燐火をよし。試ふ地中ふ投
しみ。小池中火を出せり。庭燎のごとく水上ふ火燃る。妙法寺村の火よ
りも。とて驛中の人々來りてこまを視る。も鐵ふ才人かの池のやと
りふ温屋をつくり。簾を以て水をよろづごくして地中の火を引き湯槽の竈

ふ燃もよる・又燈火とも代る池中の水を湯ゆふ煙けい・價がを以もつ浴よくせ・も此湯硫黃ゆりうの
氣きありて能めぐら癒いやの類たぐいを治はら・一時ひととき流行ひりゅうして人群ひとしゆをうせり ○ 按あわせ小地ち中なか水
脉みずなと火脉ひみずなとあり地じハ大陰だいいんヲも水脉みずな九分火脉ひみずなハ一分いぶんよりかから多おほ少すくな小火脉ひみずな、
甚稀まことにまれ地中ちゆうの火脉凝結ひみずなをうかうか氣息いきを出だす人ひとの氣息いきのどく肉にく
眼まなこ火ひと寒さむ火ひとの寒さむ火ひを引ひふ箋ひきぬの箇くの焦あわざる火脉ひみずなの氣きをとどとど陽よう火ひを
うけて火ひとうかざる氣息いきをうりうるやゑやゑ・陽よう火ひをうそとび箋ひきぬの口くちより一二寸すこの上
余よ火ひをうそとて以もつ火脉ひみずなの氣息いきの燃もつるを知し・妙法寺めうぼうじ村むらの火ひも是これ是これ
余よ發明はつめいふあくべこゝ古書こくしふ據すくて考かう得とくする所ところ。

○破目山

魚沼郡清水村の奥おくふ山さんあり高さ一里いちりあまり周圍しゆゐも一里いちりあまり山中さんちゆうをぐく
大小こひらかの破隙ぱきゆあるを以もつて山さんの名なと山半さんばん、老樹條ろうじゅじょうをつる林半さんばんより上うへ岩石がんせき

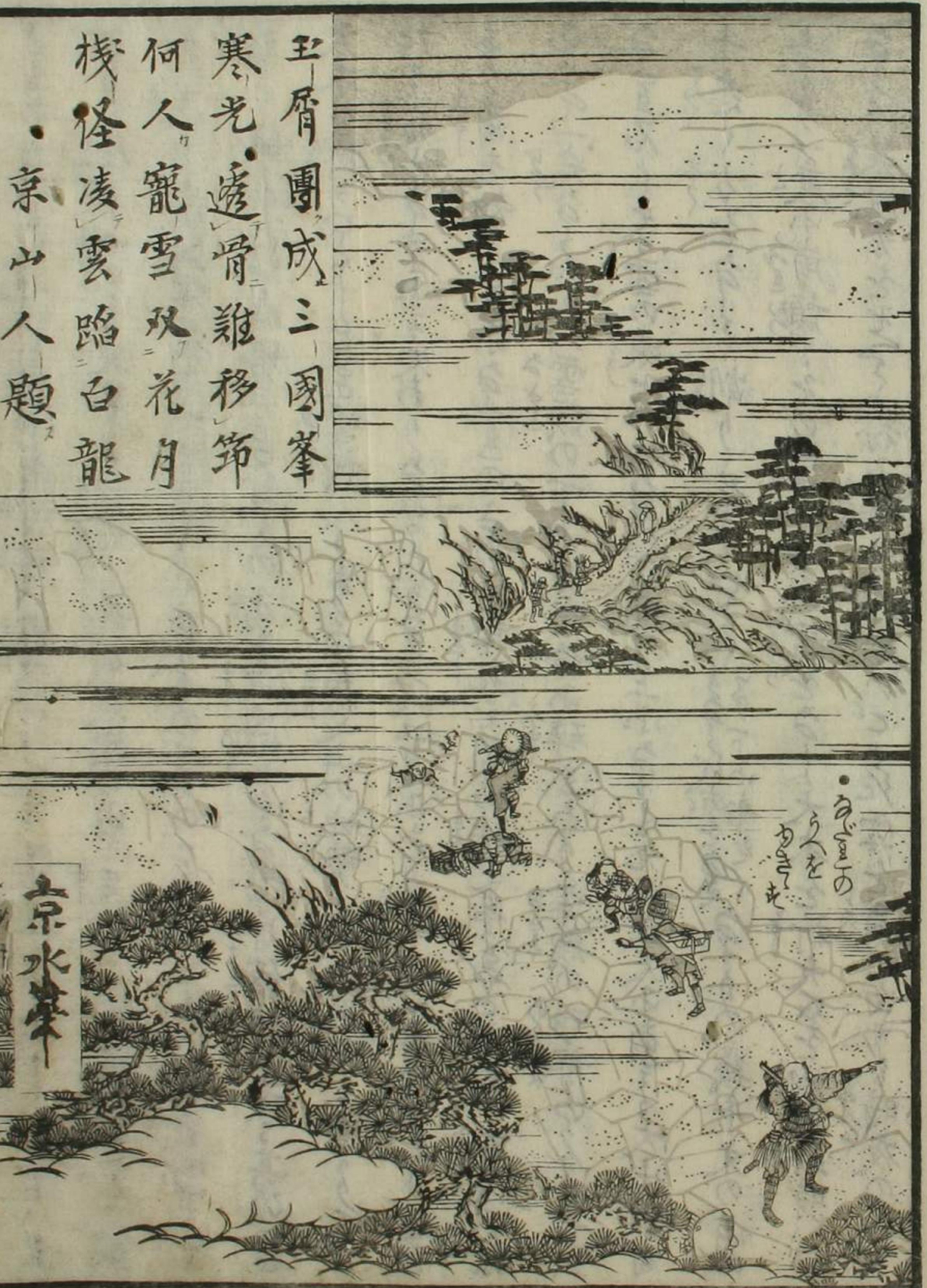
置おきくとて其形あのかたち竜躍虎怒りゆくぞうにく奇き怪けい言いふオ蕉あかねの左右あひだ小溪川こけいがわあり合あつ
て滻たきをうそ絶景ぜきけい又言いふ旱ひの時とき此滻壺しだきとうふ雪ゆきをまどうとと驗たしかめめ一年四月よんげつの
半はん雪ゆきの消きる頃ころ清水村の農夫のうふら二十人じゅうじんあまり集あつり熊くまを狩とり此山このさんのびり
の破隙ぱきゆの處ところをうそとす所ところを熊くまの住處すむところと例たとの番椒烟草ばんじょうたばこの莖くきを薪ごん
交窟こうくつのぞんで焚のそと小熊こくまをと小出こで交窟こうくつの深ふか多おお烟けいの奥おく小至こぢくろくろんと
次日つぎのひ薪ごんを増ますし山さんも焼やよと焚のそと小熊こくまへとそと一山いつさんの破隙ぱきゆをかくより烟けいをい
ごと雪ゆきの起おきぐくうけと寄き黒くろのいきのをと一熊くまを狩とりて窓まどく立たて
氣きを通とて破隙ぱきゆをうそとや天地妙めうの奇工思量きこうしりょうととべ

○雪頬

山さんより雪ゆきの崩頬くずれほを里言さちごんふうとうとう又またをととももりり按あわせふうとうとう機か下くだるるを

ゆく用もちことことバタた山さんよりよここかか雪ゆき頬ほの字じを借く用もちふ字じ書かふ頬ほハ暴風ばくふう

三國嶺雪頽の上往来の圖



京水岸

ともあまぐとく叶つるやまと雪頬ハ雪吹ふ双て雪國の難美とく高山の雪ハ里
よりも深く凍るも又里より甚一我国東南の山々里ふちう紀も雪一丈四五尺々
久淺一とく此雪にわりて岩のごとくうるの二月のこうふにまづ陽氣地平よを
蒸す解しとく時地氣と天氣との為ふ破て鄉音をうへ一片破て片く破る其ひき
大木を折りごとくこそ雪頬んともるの崩く山の地勢と日の照をとふよりてみ
だらぬとくさざる處ありきさくべ二月ふうり黒人ハその時をあり處を
あり崩を知るやあふるぞとのとあふ擊死をもの稀くあくまで天の氣候不意
ゆて一定のくびきば雪頬の下ふ身を粉ふ碎もあり雪頬の形勢いづくとく
きくまんともる雪の凍る大さへ十間以上小うるも九尺五尺ふあまる大小數百
千悉く方をうく削りこそとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
上より一度小崩頬すその鄉首百千の雪をうへ大木を折大石を倒を此時へか
くくば暴風力をとく粉ふ碎く沙礫のごとを雪を飛せ向日も暗夜の如く

その懶一筆す筆席小尽一が丁此雪頬ふ命を捨て人命を捨一人我
見聞一ころを次の巻ふ記して暖国の人の詰柄とく

或人問曰雪の形六出うる前不弁ありて詳之雪頬ハ雪の塊うん碎う
形雪の六出うる本形をうしゆひく方形へうん卷て曰地氣天ふ寔格一
て雪とうる也天の圓と地の方うるとを併合て六出をうへ六出ハ圓形の
裏に雪天陽を離て降下り地ふ飯バ天陽の圓き象うせて地陰の方う
本形不象るゆゑふ雪頬ハ千も万も圭角くのみうござ解ふもづらハ角
四くうるて日陽火の日ふててまくゆゑ天の圓ふよるて陰中ふ陽を包ミ
陽中ふ陰を抱ハ天地定理中の定格ニ老子經第四十二章ふ曰萬物貢
陰而抱陽冲氣以為和となりて此理を以てある時ハ内美きめりつもか
内美きめりつ陰中ふ陽を抱ぞて天理ふ叶せをりくへ夫ふ代りて理底
をりふざとく家内治ぞきまくとく理底ふ過牝鳥且をつくまくも

又家内の陰陽前後にて天理ふ違ふある家の亡るりと萬物の天
理誣へるをざらかうのでとくとひなまく問客唯くとくて本りの雪頬
悉く方形のとくわもあきまとどむ十ふゝて七八ハ方形をうへかづべ故
小此説を下せり雪頬の圖多く方形ふ从ふすのへ其七八をとりて摸
様を為その

北越雪譜初編卷之上終

